
仮面ライダー笑(ゲラオ)

馬路キレ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー笑^{ゲラオ}

【Nコード】

N4956T

【作者名】

馬路キレ子

【あらすじ】

笑わない男。笑うことを止めた男。仮面ライダー笑^{ゲラオ}は改造人間である。自らを狂わせ、悲しい運命を背負わせた悪の秘密結社Dの野望を打ち砕くために、彼は戦い続ける道を選んだ。

..昭和、平成仮面ライダーシリーズを意識した創作仮面ライダーです。もともとは身内向け映像作品でしたが、今回小説版に着手しました。どこまでやれるかわかりませんががんばります。

0、プロローグ

0、プロローグ

人智を超えた歪みというのは、いつの時代も存在し、誰にも見えない闇の中で、その息を潜めている。歪みの源……それは悪魔の所業か、それとも神の悪戯か。物質文明がある程度の発展に到達した現在でも、その歪みは絶えず何処かで起きている。

この現実には、確実に。

その日、西日に照らされた白壁の会議室の中で、ひとつの殺人事件の考察が行われていた。

殺人に関する事件を取り扱う警視庁捜査一課は、今日も慌しかった。

「今日九日、港区で変死体がありました。被害者の死因は衰弱死。後頭部の裂傷痕から微弱の毒性麻酔が検出されており、それ以外の外傷がないことから、やはり今回も化合弱性毒物による殺人です。被害者の様子から見て、同一犯の可能性があり……」

広めのホワイトボードに貼り付けられた殺された被害者の写真と、姓名、その情報の数々が黒いマジックペンで書かれている。説明役の背広の刑事が事件の概要を丁寧に説明しながら、他の刑事たちの前で淡々と語り続ける。

「……今月に入ってもう七件目だぞ。さしもの刑事課長もおかんむりだ」

「やれやれ、また雷が落ちるぞこりゃ」

会議の合間にヒソヒソ話をする末席の二人の刑事。

一人は低身長で小太り、一人は高身長で痩せ型の対照的な男だった。

「被害者同士の関連性はまったくなし。殺しの場所もバラバラ。あとすれば歳が二十歳前後で、血液型がA型ってことだけ……」

「通り魔的な犯行だとしても、度が過ぎるな。それに死因が外傷でも毒物でもなく衰弱死ってところが……」

ヒソヒソ話の合間に、怪奇な連続殺人事件の概要説明が終わった。それを聞いて、犯人をあげられない怒りから会議室が揺れるほどの怒号を発する課長をよそに、二人の刑事たちの話は続く。

「被害者は、全身の血液が空っぽの状態で見られる、か。なんで犯人はそんなことをするんだろうな？」

「さあな。猟奇的な殺人を繰り返す犯罪者の多くが、凡人には理解できない思考を持っている。ようは怪物なのさ。ヒトの心の中に閉じ込められた、怪物……」

そう言う和小太りの刑事は、目の前にあるペットボトルの蓋をあけ、中に入っていた清涼飲料水を喉に通していく。刑事課長の怒号が聞こえる会議室で、普通よりやや長い間、ゴクゴクと喉の渇きを癒す音を立てる刑事。グイと傾けたペットボトルの清涼飲料水は、パッケージ全体の中ほどまで減っていた。

「お前……本当に飲むよな」

痩せ型の刑事が、小太りの刑事の飲みっぷりを見てつぶやく。

「プハッ……うるせえなあ。喉が水で浸されるぐらい飲まない、なんつうかな、渇きが満たされた感じがしないんだよ」

それを聞いて、もうすでに中身がなくなっていたペットボトルの飲み口から唇を離す小太りの刑事。

「渇きを、満たすか……」

「なんだよ。別にお前の飲み物に手を出したりしねえよ」

小太りの刑事の怪訝そうな視線と、何かバツが悪そうに自分の頭に手をまわし椅子に思いつきりよたれかかる様子は、痩せ型の刑事の笑みを引き出した。

プツとふきだした痩せ型の刑事は、自分の席の前に置かれたペットボトルを手にとって、会議室のライトに当てて眺めた。やや白く濁った清涼飲料水が、ライトに照らされてその液体を刑事の顔に移す。

「連続殺人犯は案外、本当に怪物だったりしてな」

ある程度の間がたった後、痩せ型の刑事は遠い目をしながら、呟くように言った。

「おいおい、どういうことだよ」

小太りの刑事は、どちらかというと現実的な思考を持つ痩せ型の刑事にしては、おかしい発言だなと思い、よたよたかかっていた椅子から、やや身を起こして言葉を吐いた。

痩せ型の刑事は、再びペットボトルを眺めながら言う。

「煮詰まっている時は発想を逆転させろっていうのが、俺のポリシーでね」

「怪奇事件で、情報が無いのはわかるがよ。だからって、お前にしては少し乱暴な推理じゃないか？」

小太りの刑事が、苦笑いを浮かべながら話す。

だが、痩せ型の刑事は、それに対して何の反応もせず、またペットボトルを眺めながら呟くように言った。

「被害者たちの血を抜き、吸血することで自分の渴きを潤す……そういう怪物が、もしこの世に居たとしたら？」

ガタン。

発言のあと、小太りの刑事のテーブルに置かれたペットボトルが倒れ、彼の視線と体が凍ったように固まる。

沈黙。

停止。

無為。

暗転。

その空間に流れるのは、そんな似つかわしい言葉ばかり。

「お、おいおい。冗談きついぜ」

二人の間におかしな間が数秒ながれ、耐えられなくなった小太りの刑事が、やや慌てた口調で口を開く。そしてややあきれた様子で、言葉を吐き始める。

「連続殺人事件の犯人が怪物だなんて。天下の警視庁捜査一課の刑

事としても、一人の人間としても、妄想のしすぎだ。どうかしてるぜ」

小太りの刑事の発言の何処にも不正解はない。

刑事としての発想、思考。

人間としての倫理、常識。

その全てにおいて正常であるといえる。

しかし、痩せ型の刑事はそんな真つ当な反応を聞いて、さらに真顔で答えた。

「だがな、世界には色んな生物が存在している。……たとえば節足動物の中には、弱性の毒を獲物に与えて、生きたまま食べる怪物みたいなヤツだっている。人間の世界だって、海外に行けば吸血鬼伝説なんてものが実際にあるだろう？」

「じゃあ今回の犯人は、現代に蘇った吸血鬼だったのか。馬鹿らしい……」

真顔で妄想に等しい発言をするのに対して、すかさず明らかに呆れた表情と言葉を放つ。

小太りの刑事は、倒れた自分のペットボトルを起こし、また両手を頭の後ろで組んで、椅子に深くよたると、再び、二人の刑事の間に、しばしの沈黙があった。

「……なあに、こういう思考の柔軟体操も時に捜査に必要なだ」

今度は、痩せ型の刑事が先に口をあけた。

「付き合ってられないぜ。妄想も大概にし……」

小太りの刑事が言いかけた、その時だった。

「太田！ 細井！ さっきから、なあにいをお、くっちゃべってるんだ！ そんな暇があるなら速く現場に行って、近隣の新たな目撃情報がないか調べてこんかッ！」

会議室に地鳴りのように響き渡る、二人の刑事の名前を呼ぶ課長の怒声。

何百台も並んだ大型バイクのエンジンを連続で吹かしたような爆音は、すぐさま二人の背筋をピンとさせた。

「ひー怖い怖い。課長怒りのお呼びだしだ」

「相変わらず声のでかいことで……」

二人は立つと、そのまま課長に敬礼をして、会議室を出て行った。会議室のドアを開け、ドアを閉めても聞こえる課長の怒号に、キビキビと素早く廊下を歩き始める刑事二人は、いつもの雰囲気に戻っていた。

「まあよ。刑事なんだから、おかしな妄想推理より、まじめな捜査で犯人探しと行こうぜ」

「そうだな。課長のお怒りで地球が真っ二つにならないうちに片付けるか」

会議室のある廊下を抜け、その先の角を曲がり、二つ並んだエレベーターの前にたどり着くと、二人の思考の裏に、ふと思いついたかのように今回の怪奇事件の概要が浮かぶ。

ガッ……！

その時、エレベーターホールの右の突き当たりにある陽光が差し込む窓に、大きな移動する影がひとつ見えた。

「虫……？」

課長から、細井と呼ばれた痩せ型の刑事が、まぶたに指を当てて、もう一度目を見開いて、窓を見る。

「気のせいか……」

だがそこには、いつも通りの陽光が射していた。

「おい、何をしてるんだ。行くぜ」

「あ、ああ」

チーン、というエレベーター到着音が鳴ると、開かれたドアの中に二人の刑事が入っていく。

エレベーターの中に入ると、太田と呼ばれた小太りの刑事が、ふと呟く。

「まあ今回の怪奇事件……おとぎ話に出てくる吸血鬼でもない限り、ありえない話だよな……」

二人の刑事が乗りこむと、エレベーターはゆっくりと動き出した。

ガンッ！

誰も居なくなったエレベーターホールの突き当たりの窓には、いつの間にか波状の亀裂が、幾つも入っていた。

窓に映っていたのは、亀裂の原因である、巨大で、鋭く黒く光る、毛深い、棒状の、足らしきもの。

そして、その窓の外には……。

歪みは、起きていた。

この現実には、確実に。

1、笑わない男

1、笑わない男

ゆるく吹き付ける海風が、潮の香りを運んでは消えていく。

まだ朝方は肌寒く感じられる4月の空の下、一直線に続く長い海岸線を行きかう様々な車両たち。

軽自動車。ワゴン車。路線バス。クレーン車。

路上清掃車。長距離トラック。コンテナ運搬用トレーラー。バイク。

そこには、今日も普通の世界が広がっていた。

「……」

自動販売機の前で、カポツという缶コーヒーのプルタブを開ける音が聞こえた。

その音の先には、黒のジャンパーに身を包み、黒いヘルメットを左手に抱えた男が、物思いにふけるように缶コーヒーを飲んでいた。

「……にが……っ！」

目が覚めるような苦い味。というか、香り以外は苦味しかない。

男は、口いっぱいに広がる苦味に堪えられないのか、この世の破壊と言わんばかり目を瞑り、眉間に皺を浮かべた渋い顔をして、ゆっくりと手にとった温かい缶コーヒーを顔のところまで持ち上げる。まだ湯気の立つ缶コーヒーのパッケージを見る男が、うっすらと開けた目には、ブラック無糖の文字が見えた。

「また間違えて無糖買っちゃった……」

男はそういうと、路上にヘルメットを置き、どこからか片手で手掴みできる程度の空の水筒を取り出した。

「苦いのは、いつまでたっても慣れないもんだなあ」

男は水筒の蓋をあけると、ジョボジョボと音を立てながら缶コー

ヒーの中身を水筒の中に入れ始めた。黒い液体の合間に見える白い湯気が、香りを男の鼻に運ぶが、男はその香りがするたびに苦い味を思い出し、渋い顔を遠ざける。

やっと缶コーヒーの中身全てを注ぎ、水筒の蓋を閉めると、男は路上に置いたヘルメットをかぶり、スツと立ち上がり、やや急ぎ目に歩き出した。

男の向かうその先には、海岸線の内側車道に止めてあったオフロードバイクがあった。

男は駆け足気味にバイクに飛び乗ると、鍵をひねり、エンジンをかける。

「じゃあねえ、口直しに行くか」

エンジンのかかる音が聞こえ、アクセルレバーに手を沿えながら男が呟く。

そしてバイクは、けたたましい音をたてて、一直線に続く長い海岸線を駆け抜けていった。

「ううーん。いい朝だ。今日も何事もない、平和な朝を迎えられて神様に感謝します……っと」

やや潮の香りが薄まった海風を受けながら、補整されたアスファルトの道の上で、腰に黒い前掛けをつけたヒゲ面の中年の男が大きく伸びをして、太陽の方向に向かって礼をする。

「さあてと。今日も日課、始めますか」

ゆったりした白黒のチェックシャツはヨレヨレで、襟から覗ける濃紺のインナーシャツ、使い込まれたシックな茶色のジーンズで身を固めた中年の男。彼は今日も日課である自慢のレンガ囲いの小さな家庭菜園の様子を見に行った。

「もうちつとばかり暖かくなればなァ。お前たちも大きくなって、あいつに食わせてやることも出来るんだがなァ」

弱い陽射しとヒンヤリとした空気の様子を肌で感じながら、嬉しそうにじょうろで水をやり、菜園の生き物たちに声をかけると、彼は次の日課にとりかかった。

「朝のお仕事……っと」

菜園を去る彼の目には、伐った丸太をそのまま使ったような、古びたロッジ風の建物が立っていた。海風を受けるこの街に似つかわしくない建物の入り口の中に入る男。その男の頭上には楕円形の木製看板があり、その看板には『喫茶 Sunrise / Sunset』という名前が刻まれていた。

入り口のドアを開けると、カランカランという綺麗な鈴の音をたててウェルカムベルが鳴り、男が仕掛けておいた水出しコーヒーのいい香りが店内に充満していた。

「さてと、何からやりますかね……っと。そうまずは」

男はサツとジーンズのポケットから安全ピンのついたプラスチックケースの中に収められたネームプレートを取り出した。そこには『伊崎洋一郎』という彼の名前と、この喫茶店のオーナー兼マスターであるという情報が書いてあった。

「これをつけないとサマにならないよねえ……っと」

うつすらと窓から差し込む陽光をバックに鏡を見てニンマリと笑う伊崎は、今日も自身の喫茶店の開店準備を始めた。

ブルルル……！

伊崎が作業を始めようとした時、道路から一台のオフロードバイクが喫茶店の敷地の中に飛び込んできた。ゆっくりと敷地内に停車したバイクから降りる黒のジャンパーを着た長身の男を見て、伊崎は表情をゆるめながら、つぶやいた。

「お、ありゃまさか……」

バイクからキーをぬき、ヘルメットを脱いで座席にしまい、首まであがっていたジャンパーのチャックを一気に開ける男は、窓際から見つめる伊崎の存在に気付いたのか、軽く手をあげながら、喫茶店のドアを開く。

「おっす。マスター」

伊崎を良く知っている割には、笑うでもなく、ただ手をあげたまま愛想のない真顔で店内に入る男。

「相変わらずだなあゲラオちゃん。まだ開店前だったのに」

ウェルカムベルの音とともに、伊崎はゲラオと呼んだ男の無愛想な顔を見て、笑顔で迎えた。

その名前を聞いて、ゲラオは不愉快そうな口調でいう。

「マスター、いい加減その名前やめてくれないか。俺には御山サクヤって名前があるんだから」

「いいじゃないの。今も昔もゲラオちゃんは、ゲラオちゃんだよ」

「くっ……」

にこやかな伊崎に比べ、愛称であるゲラオという名前があまり気に入らない御山。

伊崎は、御山の姿を見ながら、カウンター席の内側で開店準備を続ける。

「で、ゲラオちゃん」

「なんだよ」

御山は、不愉快な表情のまま、ドカツと悪態をつくように勝手にカウンター席に座ると、ジャンパーのポケットから水筒を出し、テーブルに置く。

「今日は何しにきたの……って。まさかまた」

「ああ、口直し。勝手知ったるなんとやら。マスター、カップと砂糖借りるぜ」

御山は、カウンター席においてある厚手のコーヒークップをまるで自分の物のように手に取ると、コポコポと水筒の無糖コーヒーを注いでいく。

「あーあ。やだやだ。見たくない見たくない」

御山が気に入りの水筒を出した時点で、何かを察した伊崎が、今までにこやかさが嘘のように、一気にしかめっ面になる。

ザッ、バサッ。

ザッ、バサッ。

そして、喫茶店には、砂を掻きこんでは放るような音が聞こえた。御山の前には、喫茶店自慢の、内蔵量300グラムは入る陶器で出来た大きめの砂糖入れ。

御山の手には、カレーなどを食べる時に使う、やや大きめの平たい銀製のスプーン。

そして、そのスプーンには、明らかに尋常ではない量の砂糖の山が盛られていた。

「甘くなーれ、甘くなーれ。もっともっと甘くなーれ」

呪文のように口ずさむ御山の手は、素早く、そして手際が良かった。

そう。

先ほどの砂を放るような音とは。

御山の手によって、コーヒーカップの中に、大量の砂糖が放り込まれる音だった。

一杯。

二杯。

三杯。

四杯。

五杯。

「あ。ああ。あーあー。あーあーあーあー。やめてくれ、コーヒーがだめになる。ゲラオちゃん。もうそのへんでやめてくれないか！」

眉をひそめた伊崎の、苦虫を噛み潰したような顔がさらに歪む。

それを尻目に、御山は無言で砂糖を放り込み続ける。

六杯。

七杯。

八杯。

九杯。

十杯。

「よし、この辺でいいだろう。いい塩梅だ」

カップをスプーンで素早くかき混ぜ始める御山。

すでにコーヒーであったカップの中の液体は少なく、かき混ぜることによって、液体というより、ややゲル状に近い存在となっていた。

「ふう。さて飲もう飲もう」

コーヒーカップの縁には、まだ固形のまま残る砂糖。

コーヒーカップの中には、コーヒーであったはずの悪魔の飲み物。自分の唇まで持っていて、グイッと傾け一気に飲み干す御山。

「……甘い。これだよねコーヒーは。甘いつていいよねマスター」

常人には黒い毒物にしか見えないそのコーヒーを、喜ぶでも苦しむでもなく、あくまでも真顔でグイグイ飲んでいく御山。

「ゲラオちゃん。そんな、あきらかに体によくない飲み物を、よく真顔で飲めるね……うぶ。いやだ、いやだ」

それを見ていた伊崎の心には、すでにさわやかな朝の気分など消え、胸焼けと胃の痛みで気持ち悪さを覚えた。

数十分後。

カウンター席にいる御山を見ないように、さっさと開店準備を終えた伊崎が、ふとテレビをつける。

「この奇怪な連続殺人事件についての警察の見解は……」

映像には、伊崎と御山が良く知る街が映っていた。

「被害者の体液は全て抜き取られているところから、その残忍な犯行から犯人は猟奇的な……」

テレビの中継から流れる女性アナウンサーの声が、伊崎と御山の耳に入ってくる。

「ふんふんふーん」

事件が起きているのがこの喫茶店からそう遠くない場所だというのに、鼻歌交じりに割と気にしていない伊崎。

それに比べ、カウンター席から報道が伝える事件の概要を、マジ

マジと食い入るような眼差しでじつくり聞いている御山。

「マスター……この事件いつからだ？」

御山は、椅子にかけていた自分のジャンパーをそっと取ると、伊崎のほうを見て言った。

「あー、これね。今月からこの近くで起きてる連続殺人事件」

「たった十日で、十一件もの連続殺人か……」

「なんかね。街中で襲われるらしいんだけど、短時間で犯行が行われてるらしくて、犯人が使う凶器も証拠も、目撃者もないから警察も犯人を特定できないんだって話」

「……街中で襲われているのに証拠もない。まさか、な」

眉間を陰しくさせる御山が、ジャンパーの袖を通す。

「被害者を死なない程度の毒物で弱らせて、死体から血を抜き取って衰弱させて殺すんだって。怖い人間もいたもんだね」

「……」

「『現代に蘇った吸血鬼』なんてゴシップ記事もあるぐらい、事件が起こる前はこの世も平和だったってことかね……っと。まあ、ゲラオちゃんも気をつけないとなア」

視線をテレビ映像から御山にやった伊崎。

その声が御山のところに届く前に、御山はジャンパーを着込み、チャックを首のところまでしっかり絞め、いつの間にか席を立っていた。

「マスター。意外と人間の仕業じゃないかもしれないぜ」

さっきまで普通に喋っていた御山の声が、やや低くなって伊崎の耳に聞こえた。

「ん、ゲラオちゃん。そりゃ、どういことだい」

「ごちそうさん。なんかあったらまた寄るよ」

意味深な台詞に浮かんだ伊崎の疑問に答えることなく、御山はそくさとドアを開け、店を出て行った。

笑いもせず、来た時と同じ愛想のない真顔のまま。

ヘルメットをかぶり、自前のオフロードバイクに飛び乗り、けた

たましいエンジン音とともに海岸線道路に飛び出て、そのまま街に向けて走っていった。

まるで何かに急かされているようなスピードで。

「あーあ、いっちゃったよ」

伊崎がカウンター席に置かれた飲み干されたコーヒーカップを手に取りながら、すでに消えてしまった御山の姿を追うように、陽光の射す窓を見つめる。

「それにしても……いつからだろうね。ゲラオちゃんが、あんなに笑わなくなったのは……」

カップを片付け始めた伊崎の視線の先には、一枚の写真が飾ってあった。

そこには、まだヒゲをはやしていない伊崎と。

幸せそうに満面の笑顔を浮かべ、腹を抱えて笑う、御山の姿があった。

高層ビルが立ち並ぶオフィス街には、日の昇る朝を境目に色々な人たちがまばらに集まり始めていた。この場所に街が出来て、人が住んでから、何度も繰り返し行われてきた時間と人間の営み。その始まりが、うっすらと見えてきた頃。

「……」

とある高層ビルの屋上ヘリポートに、黒の帽子、黒のサングラス、黒の皮ベルト、全身カラスのような黒の衣装に身を纏い、無言でたたずむ謎の女の姿があった。高層ビル特有の上空に流れる強い風で煽られてはいるが、女はまるで微動だにしない。

「来たか……」

黒いルージュに浸された唇がゆっくりと開き、白い手袋をスツと自分の顔の前に出す女。その言葉の後に、女の後方でドサツと大き

なものが着地する音が聞こえた。

「大いなる闇の洗礼を受けしモノ。屍食蜘蛛、プロリフェレ・スパイダー」

女の後ろには、いつの間にか異形のモノ達があふれかえていた。
「グエッ……グエッ……」

異形のモノ達の口や手には、すでに人間のものであるう血のりがべったりとくっ付き、地面へと垂れ始めていた。

「そうだ、それでいい。お前たちは人間の生を奪い、殺ぎ、喰らい、増え。初めて、その生を実感できる存在。秘密結社Dに忠実な、ケダモノだ」

白手袋を横に流し、女がゆっくりと振り返る。

強く吹く風になびく黒い衣装が、照らされた日の光の後ろに黒い影をつくる。

その黒い影を縫って、かすかに反射する無数の赤い複眼。

「グエッ……グエッ……」

見た目は蜘蛛そのものだが、ヒト一人分はゆうに超える巨大な体を持ち、口にはメタリックな銀色を放つ強固な鎌状の牙、細い体毛のついた赤黒い八本の足先には、獯猛で鋭い爪が生えている。

その怪物たちの姿を見て、ニンマリと不気味な笑みを浮かべる女は、再び振り返った。今まで横に出していた手を下ろし、今度は白手袋からスツと伸びた人差し指で、人間たちが集まり始めた高層ビルの下界を指した。

「目の前に広がる全てがお前たちの餌場だ。生きるもの全てを奪い、殺ぎ、喰らい、増えろ。行け！」

「グエッ！」

女がそう言うと、蜘蛛の怪物たちは声をあげ、腹部にある突起から強固で滑らかな糸を吐き出し、それを縁にかけ、次々と高層ビルの谷間へと降下していった。

女はそれを見ながらニヤツと笑い、ヘリポートをゆっくり歩き始めた。

「世界に恐怖と破滅をもたらすために。すべては秘密結社Dのために……」

風に吸い込まれる霧のように姿を消す女の微笑みは、邪悪に満ちていた。

2、変身

2、変身

「仕事。だるいなあ……」
ブツブツとつぶやく男。

外資系の貿易会社に勤めるサラリーマンの男は、ややくたびれた黒のビジネススーツに身を固めながら、関係書類が入った薄いカバンを持って階段をのぼっていた。

「なんでこんな日に限ってエスカレーターは故障中なんだよ」
イラつく男の視線の先、階段の横には、でかでかと故障中と書かれたエスカレーター。

都市部に行き交う、いくつもの路線のターミナル駅として活躍する駅の地下から地上に出ようと、100段以上あるやたらと長く広い階段をのぼり始めた男の顔には、うっすらと汗が浮かんでいた。男のまわりには、これから仕事に向かおうとする大量の人、人、人。

急なエスカレーターの故障で階段をのぼるはめになってしまった、憂鬱な人たちばかりが、ただ導かれるように地上の光を目指している。

いつもの朝なら味わうはずもない階段をのぼるという徒労感、循環されていない地下の空気が鼻腔と肌を撫でていく不快感、これから仕事に向かわなければならぬという憂鬱からの虚脱感。

「朝からついてないことだらけだぜ」
ついてないつぶやく男は、長袖のシャツにじむ汗を背中に感じながら、やっと階段の先にある出口にたどり着いた。

しかし、この後に起こることについて、彼が本当についてないと思うには、少々……時間が足らなかった。

「うわああッ！」

悲鳴。

オフィス街に続く出入り口に響く、異色の音に振り返る人たち。

地下からのぼった階段の先、その朝日が覗きこむ出口の先。

たしかにそこには、今の今までサラリーマン風の男が立っていたはず。

だが今、そこには誰も、何もいない。

「きゃああッ！」

再び悲鳴。

ガコン、と地上との空気交換用に設置された地下鉄のダクトの蓋が外れる音がしたあと、せこせこ階段をのぼっていたヘッドフォンをかけた女がその場から消えていた。

「どうしたってんだ、いったい。ぐわッ！」

野太い声。

今度は、それまで額から噴出していた汗をぬぐい、悲鳴のしたあたりに振り返った汗かきの着流しの男が、グサッと何かが刺さる音を立て、またその場から消えていた。

「……なになに、なんだっていうの!？」

不安感を感じたOLが、階段の先の出口を急ぐ。

悲鳴のあと、人間がその場から消えるという、あきらかな異常。

自分にも訪れるかもしれない『見えない』という未知への災いは、ただただ彼女の心を恐怖へと追いやる。

「ギャアッ！」

再び男性の悲鳴。

それが彼女の耳に入り、またそこに立っていた人間が消える。

一刻でも、一秒でも速く、その場から立ち去りたい彼女の気持ち、は、逃亡という行動となってあらわれる。

カツカツカツッ！

ヒールが地面を叩くけたたましい音。それは足早な彼女の恐怖心

を表すものだった。

苦勞してのぼってきた階段を駆けくんだり、ありとあらゆる人の中をかきわけ、かわるがわる変わる変わる背景。そして後ろから聞こえる、人間の悲鳴。

いつしか。

彼女の顔には。

恐怖しかなかった。

シウルシウルシウル……

「……!？」

その時、彼女の首に違和感が走った。

長く束ねられた白い糸のようなものが、自分の首に強く巻きつく。彼女の顔は徐々にその苦しさを増し、手は、苦しみを解くために巻きついた糸をガツとつかむ。

だが、振り解こうと思っても巻きつきは強く、ちぎろうと思っても、粘着質な糸は彼女の込める力に反発するように締め付けを強くする。

「……ンッ!!」

あたりの人に助けを呼ぼうにも、後ろから巻きついた頑丈な糸が首を絞める力を増し、彼女の声はカエルのような濁った悲鳴しかなかった。

グイッ……

そして糸は、彼女の体を強く引っ張る。

引っ張る、というより、首ごと体を吊り上げるような、恐るべき力で。

彼女は最期の抵抗とばかりに足に力をいれてその場をするが、力に負けて、彼女の体が宙に浮くと、一瞬にして構内の天井に吊り上げられる。

「……!!」

首を絞められ、体全体が酸欠状態に陥った彼女が最期に見た光景。それは。

「グエツ……グエツ……」

天井に張り付く巨大な蜘蛛のバケモノの群れと、首や手足を糸で包まれて、拘束された人間たち。

けだるい日常の崩壊を意味する、恐怖の顔を浮かべ。

体に突き刺された管から、バケモノに生きたまま吸われる体液。

そして、だんだんとしぼむ肉の塊。

「……」

目を疑う光景と極度の酸欠は、彼女の意識を遠くへやる。

だが、たった一瞬の出来事だというのに、彼女にこれほど確定的で具体的な『死』そのものを予兆できたことはない。

目の前のバケモノたちの手にかかって、死を迎えようとしている日常。

そんな、死に向かう日常の一部に自分自身もなってしまうのだということが認識できたところで、彼女の意識は途切れる。

だが、その時だった。

彼女の首を締め付けていた糸が、突如として断ち切られる。

乱れた麻のように、繊維質をまばらにあたりに撒き散らしながら、ゆるやかに解かれる粘着質の糸。

次の瞬間、今までかかっていた吊り上げるような強い力が抜け、ふわっと宙に浮かぶ彼女の体を、今度は何かが抱きかかえるように強く支える。

落下とともに加速した体は、いつの間にかゆるやかに着地していた。

意識の途切れた彼女に、それが知覚できたかどうかはわからない。ただ、結果として残っていたのは、死ではなく、生だった。

「グエーッ、グエッ！」

天井に張り付いていた蜘蛛のバケモノたちの声が荒々しくなる。
バケモノたちの視線の先には、黒いジャンパーに黒いヘルメットの男が立っていた。

「……悪い予感が当たった。やはりお前たちの仕業か」

救出した彼女を物陰に隠し、バケモノたちを背にして、噛み潰すように言葉を吐く男。

その足で、一瞬にしてバケモノの糸を断ち切り、その腕で、落下する人間一人を抱えながら固い地面へと着地した。およそ人間離れた男。

男はバケモノたちを見るべく悠然と振り返り、黒いヘルメットを脱ぐ。

差し込むライトの光に当てられた顔は、憎しみの色を浮き上がらせていた。

その男は、御山だった。

「グエッ！」

振り返ったのを挑発と受け取ったか、天井に張り付いていた蜘蛛のバケモノが、さっきまで捕食していた獲物を捨て、御山に襲い掛かった。

糸を切り離し、ドサドサと重力に負けて落ちていく人間の体などお構いなしに、その跳躍力で強く天井から鋭い爪を御山に向かって突き立てるバケモノ。

御山は、そんなバケモノたちの動きを見て、構えるでも、逃げるでもなく、その場に立ち尽くした。

「グエーッ！！」

気色の悪い声をあげながら、御山の心臓めがけてバケモノの爪が届く。

コンクリートに穴を開ける爪の硬度と鋭利さからいって、普通の人間ならば、かすただけで致命傷になるであろうスピードと破壊

力。

だが御山は、それに対して腰を落とし、ただ拳を引いた。

「ゲェビャッ！」

グンツと空気が震えるような音とともに、蜘蛛のバケモノの声が聞こえた。

気付けばバケモノは、遠くエスカレーター壁まで吹っ飛ばされ、固い灰色のコンクリートでコーティングされたその壁に、深くめり込むように倒れていた。

命を奪われる瀬戸際だったはずの御山は、硬く握った拳を前に突き出すだけで無傷だった。

「餌は……よく選べ」

御山は、体液を撒き散らしながら崩れ去るバケモノの体を見て、あくまでも表情に浮かんだ憎しみの色を解かなかった。

バケモノを突き飛ばした衝撃によって生じた摩擦熱は、御山の拳に湯気が沸くほど赤く熱いものだった。

人間では反応できないであろうバケモノの攻撃をかわしもせず、さらに人間大まで巨大化した蜘蛛のバケモノを一撃で吹っ飛ばす恐るべき力。

その力は、バケモノたちの目に脅威と感じられたに違いない。

気付いた時には、無数の蜘蛛のバケモノたちが一斉に御山に飛び掛っていた。

さっきまで餌となる人間に与えていたはずの恐怖心が、いつの間にか彼らをひとつの思考に……いや、生物そのものに備わった生存本能に突き動かさせていたのだ。

『殺らねば、殺られる』

御山に襲い掛かる無数の蜘蛛たちから放たれる無数の糸、ギラリと光る爪と牙、それらを前にして御山は、すでに常人を超える脚力で駆け出していた。

「餌だ……俺にとってはお前らが……」

階段の手すり近くにある厚い壁を蹴り、御山の体は大きく宙に飛

び上がった。

バケモノによって放たれた無数の糸は、御山の残像を追うように壁に粘着していく。

「Dへの憎しみを癒す、唯一の餌だ！！！」

牙を突き立てて、御山のほうへ飛び掛ってくる蜘蛛のバケモノの腹を横なぎに蹴り、その大きな力で出来た反動を利用して、もう一方から爪を伸ばしてきたバケモノを硬く握った拳で、思いっきり、ぶん殴る。

御山が空中で姿勢を動かすその度に、あたりの壁や天井に緑色の体液を撒き散らしながら、蜘蛛のバケモノが四方八方へと吹き飛び、叩きつけられていく。

「グエツ！グエエツ！！」

一瞬にしてはあまりにも多くの出来事が消化された、数秒間。

御山が一度飛び上がったから着地するまでに、すでに九匹以上の蜘蛛のバケモノが死骸となって存在し、あたりに血なまぐさい死臭を撒き散らしていた。

「グエツ……グエツ……！！」

蜘蛛のバケモノたちが、ドサツと音をたてながら地上に降りた。

御山を囲むようにとられた距離は、半径約3m。

だがどのバケモノも、御山の人間を超えた実力に手が出せず、うろたえるようにあたりを右往左往するだけだった。

「どうした。Dの改造実験の成果は、その程度か？」

バケモノたちを前に、誘うように体液で塗れた足と手を悠々と広げ構える御山。

「来ないのなら」

御山は、再びバケモノの一端に駆け出した。

「俺が」

糸を出してきたバケモノの攻撃を避け、素早く強烈な蹴りで吹っ飛ばしながら、近くにいた次のバケモノに拳を突き立てる御山。

「倒すまでだ」

身を守ろうと防御したバケモノの足ごと、御山の拳はバケモノの腹に突き刺さった。

再び撒き散らかされる、強烈な死のスコール。

「グエッ……！！」

それを見て蜘蛛のバケモノたちは、糸と脚力を使って、全力で階段の先の出口へと逃げていった。

「……逃がすか」

無数のバケモノと人間の消えた階段に残された、バケモノと人間の無残な死体の山を見て、御山の心と体は再び湧き出た憎しみに染まる。

「罪のない人々の笑顔を奪うお前たちを、俺は絶対に許さんッ！」
拳を震わせ、怒号を咆え終わると、御山は出口に向かって駆け出していた。

「何なんだこのバケモノは、うわあッ！」

地下鉄の出入り口から、オフィス街に飛び出した無数の蜘蛛のバケモノは、行く先々で人間を襲い、その血液を奪っていた。

「ギャアアアアッ！！」

車道に飛び出したバケモノが、乗用車やトラックの屋根や窓ガラスに飛び乗った。

バケモノは、車の屋根やガラスに爪を突き刺し、人間一人が入れそうな入り口を開けると、その場で糸を吐き、運転手や同乗者の顔を包んで窒息させ、長く伸びた管を刺し、悲鳴をあげながら何もすることが出来ない人間をただただ吸血する。

そして、行為を終えた人間の体であったものは、力をなくし、糸を引っ張るバケモノによって引きずるように道路に無残に叩きつけられる。

歩道、車道、老若男女を問わず、オフィス街にいる様々な人間た

ちが、無抵抗に、無差別にバケモノに殺されては命を吸われ、抜け殻となった体を道々に晒していく。

「グエツグエツ！」

バケモノは、一人の人間を吸い終わると、驚くべきことに、その固体数を増やしていく。

吸血を終えると、大きく体をくねらせ、腹のあたりから丸い卵のような物体を噴出させる。その物体は空気にふれるとすぐさま割れ、流れ出す液体とともに4、5匹の小さな蜘蛛のバケモノがあふれる。小さなバケモノは親を探すようにすぐさま歩き出し、その後みるみるうちに巨大化し、一分ほどで生み出した蜘蛛のバケモノと同じ人間大のサイズになっていた。

「グエツ……グエツ……」

未知への恐怖へ悲鳴をあげ逃げ惑う人間、運転手を失ったことで追突事故を起こし爆発し、燃える車体。

死んでいく日常を尻目に、非日常の歪みが広がっていく。

増え続ける蜘蛛のバケモノの数は、いつの間にか千匹をゆうに超えていた。

ドンッ！！

「グエツ！」

死臭が火災によって空中へと巻き上がり、大量の非日常の群れが町中に放たれた中、駆けつけるまでにあたりのバケモノをぶつとばし、立ちすくむ御山の姿があった。

その瞳にうつるのは、ただ、無残に殺された人々と、バケモノに対する憎しみの色。

それ、だけ。

「グエツグエツ……」

大幅に数を増したことによって、御山に対する恐怖心をぬぐった蜘蛛のバケモノが、今度は御山を煽るように、糸で包まれた人間の死体をバタバタと積み上げていく。

御山は、その光景を淡々と見ながら、胸の奥からくる衝動を体に宿らせていた。

「……どんなに」

そして彼は、バケモノたちの前でつぶやき始めた。

「……どんなに数を増やしても」

スツと手を前にだすと、御山の手には長方形のカードデッキのようなものが握られていた。

「……俺は、お前たちを倒すまでだ！」

カードデッキを正面にかざした時、御山の体から機械的なベルトが浮き上がった。

左手で握った拳をグイッと前に出すと、カードデッキを握った右手で、すぐさまベルトの中央に差し込み。

「……変身！」

御山は、そう、大きく言い放った。

すると白い光と黒い影があたりを交差し、二つは大きなラインとなって御山の全身を包んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4956t/>

仮面ライダー笑(ゲラオ)

2011年6月2日13時10分発行